

## ◆ヨルダンとはどんな国か？

### 【位置】

アラブ圏にある国で政治的に難しい位置にある。面積は北海道より多少大きい位で、人口は約560万人。首都アンマンは一時期イラクへの入り口として有名になった。中東の中の中継地点に位置づけられ、国内は12の郡に分かれている。一番貧しいと言われているのは南部地域。ちなみに先日殺害されたテロリスト、ザルカウィの出身国としても有名で、彼は自分の出身国でテロ行為をしたとして、自分の出身国の人々からも非常に憎まれてしまった。

### 【政治】

政治形態は立憲君主制で、議会もあるが、王様もいる。立憲君主制の例としてはイギリスが有名だが、ヨルダンでは王様の力が非常に強い。内閣は王様の実施機能的なイメージだと外国人の目には映る。

### 【歴史】

50万年前から人類が住んでいた古い歴史を持つ国。産業の面から見ると、気候の良いヨルダンバレーでは昔から農業が行われ、交易も盛んに行われてきた。歴史の視点から見ると、紀元前1世紀にはペトラ遺跡で有名なナバティア王国が誕生。その後歴史に翻弄され辺境の地となるも、オスマン帝国の隆盛により再び歴史に登場。1920年にはイギリスの統治下となり、その頃には映画でも有名なアラビアのロレンスが暗躍した。その後アブドゥラー1世が国王として君臨し、トランス・ヨルダン王国が成立。第二次世界大戦後独立を果たし、ヨルダン・ハシェミット王国となった。第二次世界大戦後、イスラエルが成立。パレスチナを助けるかのようにアラブ諸国が競って自国の領土を広げる。その結果アブドゥラー1世はヨルダン川西岸地区を自国の領土に加えるも、エルサレムに行きかけて演説している最中に、恨みに思っているパレスチナ人に暗殺された。

その後即位したフセイン国王（アブドゥラー1世の孫）は民を大事にし、良い王様になった。第三次中東戦争のときに、一方的な戦いでヨルダン川西岸地区をイスラエルに取られた。これをきっかけにヨルダンは二度と戦争をしない平和外交に転じた。中東戦争の結果大量のパレスチナ人がヨルダンに流れ込んできた。難民キャンプの人口も合わせると、ヨルダンの人口の70%がパレスチナ難民とその子孫である。残りの30%は遊牧民その他。最近の問題は、イラクからの多くの人びとの流入。（イラクの人はビザなしでヨルダンに入れる。）多くのイラク人が下町に流入しているが、下町に暮らす生活レベルの人のみならず金持ちのイラク人も流入している。

### 【経済】

ヨルダンは石油が出ないので、産業としてはリン鉱石・天然ガス・塩・観光・農業が中心。援助機関からの援助資金への依存度は高く、外からの援助なしにヨルダンの繁栄はありえない。日本政府の円借款の額も非常に大きい。

有名な死海では近年水がどんどん減っている。イスラエルと協力して紅海から水を引く大々的な工事を施工し、水を増やそうという計画もある

## ◆ヨルダン人とはどんな人たちか？

### 【信仰】

イスラム教を信仰する人びとが9割以上を占める。イスラム教徒には6つの使命〈信仰告白・1日5回の礼拝・喜捨・断食・一生に一度はメッカへの巡礼・目的達成のための努力(=ジハード)〉がある。

### 【言語】

アラビア語を話す。挨拶言葉を大切にし、相手とのコミュニケーションを重要視する。

### 【人口集団】

田舎に行くと、村全体が一部族になっていたりする。ファミリーネームが同じ人が殆どで、血のつながりを重要視する。日本人が考える村落のイメージとヨルダンの村落は同じではない。

### 【ものごとの考え方】

流動性を尊ぶ。片倉もとこ先生はこの流動性を『社会的流動性』『経済的流動性』『文化的流動性』と分類している。

#### 『社会的流動性』

互いに訪問しあうことが大好き。ただ互いに訪問しあうとはいえ、実際には習慣が都会では簡素化されつつある。(友達・親戚間のみでの交流。)

#### 『経済的流動性』

じっとしているものから何かを得るのは良くないことで、銀行に預金して利子を得ると言うのは良くないことの例。後述の小額ローンの貸付事業でも利子をつけることによるトラブルがあった。『施す』という考え方が重要で、例えば貧しい人が訪ねてきたら小額で構わないので幾ばくかのお金を渡す(=自分の幸せを他人に分け与える)べき。『与える文化』を持っている。

#### 『文化的流動性』

自分が子どものときに日本がどうだったか？ということを考えながら行動すると間違いない。相手の気持ちを慮って行動するのが重要。

『インシャーラ』=御心のままに。NOの代わりに使える言葉。人間関係を壊さず、潤滑油として使える。

『ブックラ』=明日ね。要らないという意味の婉曲表現。

日本と同様に曖昧な文化を持っており、YES・NOをはっきりと表現することは“粋”ではない。

## ◆ヨルダンはなぜ人口増加に悩むのか？

ヨルダンは深刻な人口増加に悩んでいる。ヨルダンは小国でかつ石油が出ない。以前は世界的に見ても人口増加は非常にゆっくりとしたスピードで進んでいったが、最近(ここ250年位)は、世界的規模で大きな問題となっている。かつて世界は多産多死型であったが、医療技術の進歩により多産少死型に変化。その結果世界全体の人口が増加した。現在先進国は人が増えない状態にある。その一方で途上国の人口は増加を続けている。その結果先進国と開発途上国の人口を割合で表すと、現在世界人口の85%以上は途上国の人々という状況にある。

現在世界平均の人口増加率は1.2%。人口増加率が2%で35年、1%で70年で

人口が倍増するという状況下で、2.2%や2.5%という数字は国への負担が多い。世界のどんな地域が人口増加に悩んでいるかという点、東アフリカ・中央アフリカ・西アフリカ等のアフリカ地域及び西アジアが代表格である。さらに西アジアの中でもどの地域が深刻な人口増加問題を抱えているかを分析するとアラブ諸国である。つまり、アフリカとアラブ諸国の人口問題が突出していると言える。かつては、南アジアの人口問題が注目されていたが、最近ではインドがこの問題を解決しつつあるため、南アジアはこの問題であまり注目を浴びなくなってきた。

ヨルダンの人口は1952年で60万人位だったのが、2005年には550万人になっている。この数字は、ヨルダンの面積と国力を考えると、とても養うことのできない数字である。我々が人口問題のプロジェクトに取組み、家族計画を導入していく中で、ある時サウジアラビアに近い地域に住んでいた遊牧民であるベトウィンの部族長に呼ばれ「今のヨルダンの状況で、隣国イラク・パレスチナに挟まれ人口を必要としているこのときに、なぜ家族計画なのか？」と尋ねられた。私は「日本は小さな国だがヨルダンよりもっともっと人口が多い。それでもまだ人口を必要としている。それはなぜかと言うとそれだけの国力があるからだ。日本は国が人びとをサポートできるだけの国力を持ち、今でも国としてもっと多くの人を必要としている。一方ヨルダンはどうだろうか？これ以上人口が増えたときに、国が人びとを養うことができるか？」と答えた。この問答でこのベトウィンの部族長からは当該プロジェクトに対する賛同を得ることができた。

国力を考えるとヨルダンの高い人口増加率は危機的状況にある。今はイラク難民、その前はパレスチナ難民が数多く流入した。それら難民としての人口増加もあるが、ヨルダンの人の出生だけを見ても人口は増加している。ヨルダンは西欧からの援助を受けており、避妊の実行率も最初は急激に進んだが、途中で伸びが止まり、現在伸び悩んでいる。実際生まれてくる子どもの1/3は望まない出産である。もっと問題を明確にすると、ヨルダンの人口の61%は25歳未満で、今後出産適齢期になる。そのため今よりも加速度が付いて子どもの数が増えると予想されており、妊娠可能な年齢の女性の増加も懸念材料である。ヨルダン政府の予測では、2020年の人口は次の通りとなる。

◆シナリオ1◆

2005年時点の合計特殊出生率である3.8人がこのまま続く場合。→784万人。

◆シナリオ2◆

合計特殊出生率が2010年に2.9人。2020年に2.1人（2.1人と言うのは人口が増えもしないし減りもしない数。）になる場合。→720万人。

両者の差は64万人で、今ヨルダン政府が目指しているのはシナリオ2の方である。シナリオ2では、一人当たりの教育費を7万円節約でき、2020年までの医療経費も1000億円節約できる。ヨルダンは水が無いので、イスラエルから水を買っている。また、ヨルダンは石油が出ないため、イラクから石油を非常に安く売ってもらっている。かつての湾岸戦争時、ヨルダンはイラクの味方をして、アラブ諸国から総スカンをくいや、出稼ぎに出ている人が全員帰国させられ、失業率が上がるということ

経験した。ヨルダンはこの国とも仲良くしないと生きていけない位置にあり、こと水に関しては人口も増加している今、死活問題となっている。シナリオ2では量にして6億5000万m<sup>3</sup>の水を節約できる。これらをトータルすると、政府にとって9000億円の節約が可能となる。したがって、ヨルダン政府はシナリオ2を目指している。

#### ◆ヨルダン政府の対応

今の王様はアブドゥラー2世。イスラム圏の中でヨルダンは以前から家族計画に比較的寛容であったが、2004年に国王自らがこの問題の重要性に言及してからは、より活動がやり易くなった。現在国王が自由貿易や近代的政策を打ち立てることにより、ヨルダンは経済成長しているが、今の人口増加ペースだと経済成長を実感できない状況にある。このような中「『産児制限』を国家的キャンペーンとして展開する必要がある。」と国王自らが言及したことによって、我々の取り組みは後押しされた。その結果、『リプロダクティブヘルスのアクションプラン』が立てられ『2020年迄に合成特殊出生率を2.1人にする』という我々から見れば壮大な目標が立てられ、外国の協力を得ながら推進していった。

イスラム教の思想の下では『子どもは神の意思で授かるもの』というような考え方がベースにあり、本来『家族計画』であるとか『リプロダクティブヘルス』であるとかいうことは市民権を得にくい状況にあるが、ヨルダンでは『リプロダクティブヘルス』の考え方を理解してもらえ、開放的な雰囲気生まれていることを実感している。

#### ◆日本の貢献

2004年にアブドゥラー国王がメッセージを発信して以降、日本としても新たな家族計画のプロジェクトを実行することとなったが、それまでも色々な貢献を行ってきた。アラブ或いはヨルダンでこのような活動をする場合何がポイントかと言うと、『女性の立場』『女性が意思決定をできない』ことではないかと思われる。『男性は女性を守るもの』『女性は保護される立場』という考えがあり、女性と男性の役割が非常に明確化されている。しかし、家族計画は夫婦が話し合っ『実行するか否か』『子どもの数は何人にするか』を決めるべきものなので、そのためには妻が夫ときちんと対話できるだけの力を持つことが大事であると考えた。また、男性自身にも家族計画或いはリプロダクティブヘルスを自分自身の問題として捉えてもらえるよう、語りかけていくことが重要であると考え、男性と女性の両方を対象に啓発活動を行った。ただ、男性に「家族計画のワークショップをするから。」と言って案内をしても誰も来ない。或いは集まってもこの問題にさほど関心が無い。このような中で男性に関心を持ってもらうためには、人口問題を『地域の問題』『地域の開発の中の問題』と位置づけることが重要と考え、地域開発的な要素をプロジェクトに盛り込んだ。つまり男性にこのプロジェクトへの関心を持ってもらうために、地域に役立つ活動をプロジェクトに盛り込むこととした。結局、単なる家族計画という枠組みの中で家族計画を進めたのではなく、もっと広い視野で家族計画を進めたという点が評価され、このプロジェクトはJICAの中で表彰を受けることとなった。また、このプロジェクトを実施していく中で、プロセス段階の評価をこまめに自分たち自身で行った努力についても評価され、この点でも表彰を受けた。

1997年から2000年にかけての第一フェーズは死海の近く、夏は50度近く

まで気温が上昇する、ヨルダンの貧困地域で実施した。ヨルダンでは社会的に『喜捨』の考え方が浸透しており、こういった貧困地域では、『自助努力』という考えが無く、『物をもらう』ということに慣れてしまっている。我々の事業の中に『収入創出のための小額ローン』というものがあつたが、こういった地域の人々には『借りたお金を返す』と言う考え自体が無い。そういった考え方の違いから、大変苦しんだ第一フェーズの3年間であつた。

つづく第二フェーズ(=前述の表彰の対象。)では、プロジェクト自体が大きく成長。第一フェーズで失敗したところ、良いところをきちんと記述し、失敗したところはどう改善すべきかを考えながら進めていくことで、このプロジェクトがステップアップしていった。プロジェクトを推進するには、地域の賛同を得なければならない。そのため、対象地域で組織的にボランティアを募ることとした。特にボランティアには女性の積極的な参加を促し、男女が共に参加するよう働きかけ、地域の意見を取り入れたプロジェクトとなるよう努めた。これらのボランティアを活用することで、地域で問題が起きたときには、その地域のボランティアの人に動いてもらうようなシステムを構築。プロジェクトが『アンマンに住んでいるヨルダン人と日本人のプロジェクト』ではなく『地域のプロジェクト』なんだという意識を高く持ってもらえるよう努力した。

一方、集まりを重ねれば重ねるほど、もっともっと話し合いたいと言う要望が地域から出てきた。しかし、我々としてみれば対象地域が多いため、特定の地域で頻繁に集まりを持つと言うことは不可能であつた。その打開策として、地域を対象としたニュースレターの発行が始まつた。毎月、プロジェクトが何をしていて、来月は何をするのかといったことを発信することで、ニュースレターは地域の人びととの良い関係の維持に貢献したと言える。

イスラム圏では女性と男性と一緒に座ることも難しい。最終的には比較的進歩的な地域では夫婦一緒にワークショップに参加してもらうことに成功したが、例えばベトウインの生活する地域では、夫婦一緒にワークショップへの参加を呼びかけても、『男性が前に陣取り、女性は後ろに座る』『男性しか発言しない』ということがあつた。ワークショップのファシリテーターが女性に意見を求めると「どうして夫と一緒にこんなワークショップをしたのか。」というような発言が出てくる状況で、どうも上手くいかなかつた。そのため、プロジェクトの進め方は地域によって色々であつたと言える。

ワークショップのテーマは時にかなり女性的で、例えば『妊産婦健診の重要性』であるとか『母乳の重要性』などということもあつた。これらのテーマは是非男性にも理解してもらいたい事柄なので、男性にも参加を呼びかけるのだが、結果的には男性は誰も来ない。そこで現地の担当者にどうすればよいかを工夫させたところ、「男性が来ないんだつたら、こちらから出かけていこう！」ということで、ベトウインの所にこちらから出向き、テント(=ベトウインの住まい)でビデオを見てもらうような活動もした。ワークショップはこちらから答えを与えるものではなく、例えばビデオを見た後に対話を通じて自身で答えを考えてもらうというように、お仕着せではないものを心がけた。そして最終的には117のワークショップを開催した。こうした活動を経て男性から女性に対し「家族計画について勉強してきた方がいいよ」「妊産婦

健診を受診した方がいいよ」「産後健診を受診した方がいいよ」という発言が出るようになった。

もう一つの取り組みとしては、既婚女性を対象に家庭訪問を行った。実際子どものいる母親はなかなかワークショップに参加できない。そのような状況下で行った家庭訪問は非常に有効な手段であった。一対一の話であれば、個人的な悩みも相談できるため、集団を相手にしたときとは全く違う効果を発揮し、女性が変わる大きな手助けとなった。『避妊具の説明』『家族計画のこと』『妊娠中の健康のこと』『年齢を重ねたときに気をつけるべき病気のこと』『女性のエンパワーメント』などなど様々な事柄をレクチャーするためのツールを作成し活動を展開した。このツールは一方的に何かを教えるといったような性質のものではなく、会話を促すような構成になっている。結果的に、8440件の家庭訪問を行った。これらの活動を通して住民の意識が高まっても、受け入れ側の地域のヘルスセンターの技術が低いと問題なので、併せて助産師や准看護師の研修も行った。ヨルダンの助産師教育の問題は教科書では教えるけれども実地が少ないということがあるので、実地を重視した研修を行った。

さらに収入創出の事業も行った。女性に自信を持ってもらうためには、女性がそれなりの収入を得ることが重要だと考えた。そのため、小額ローンの事業を行い、女性たちが収入創出のために養蜂や山羊の飼育に取り組めるようにした。山羊を飼育し乳製品を売ることによって収入を得ると言うことは女性にとって初めての経験であった。このローンを利用した女性は、皆が皆、自分自身を『プロダクティブパーソン (=生産できる人間)』と位置づけるようになり、家族計画やジェンダーに対し非常に肯定的になった。また、夫婦のコミュニケーションがよくなり、男性へ積極的な働きかけを行えるようになった。収入創出事業は女性を対象としたものであったが、ある意味家族全体に収入をもたらしたとも言えるわけで、男性がプロジェクトに親近感を持ち、夫が妻を手伝うようになり、妻を一人の人間と認め、妻を尊敬するようになるというポジティブな成果をあげることができた。

最後に家族計画等がどれだけ実行されたか。今ヨルダンでは前述の通り家族計画は停滞期にある。そのような中で、我々の対象地域で10%以上の増加を見たことは、大きな成果であった。プロジェクトの外部評価者から最も驚かれたことは、家庭訪問を行うボランティアの女性が、一番力をつけ、プロジェクトの考えを最も理解し、何か問題があった時にきちんと説明し指示することができるようになるまでに成長したことであった。そういったボランティアは自分自身の夫にも良い影響を与えている。ボランティアの一人であるアッスリーエを例にとると、彼女は夫と非常に良い関係を築いている。彼女の夫は彼女の活動を理解し、彼を通じて彼女の活動が広がっていくというように、最初は点の活動が面的に浸透していくということが起きており、このことはプロジェクトの大きな成果であると言える。アッスリーエ自身はこの活動を通じて、村人から尊敬と感謝の念を抱いてもらえるようになったことが一番だと語っている。村の人は何か知りたいことがあるときには彼女のところに来る。このようなことを通じて、彼女は自分自身に自信が持てるようになったとのことである。今後はアッスリーエのような人が核となってプロジェクトが益々浸透していくであろうと思われる。